

## 帰国生教育

帰国生教育部会

### I はじめに

本校の帰国生（帰国生入試枠で入学した生徒）教育は1979年に受け入れを開始して以来、今年で44年目になる。本校の帰国生教育は、時代の変化に伴い、「適応教育」主体から「個に応じる教育」へと変化してきたことに特色がある。帰国生が海外生活の中で育んできた能力を日本の中学校生活で、いかに発揮させ、支援していくのか。「帰国生補充学習・発展学習」の年間指導や実践事例を紹介するとともに、今年度の「文化祭での帰国生発表」の取り組みについて報告する。

### II 本校における帰国生教育の目的

- ① 一般生との交流を図り、国際理解を探るとともに、互いに啓発し合う生徒を育成する指導を重視する。
- ② 学校生活を通して、日本での生活適応を図る。
- ③ 日本語の知識・能力の不足を補充する。
- ④ 海外教育条件に伴う未学習内容を補充する。

### III 帰国生徒数と滞在地域

#### 1. 各学年男女別内訳 (単位：人)

学年	男子	女子	合計
1年	10	2	12
2年	7	3	10
3年	6	6	12
計	23	11	34

#### 2. 滞在地域別内訳 (単位：人)

学年	アジア	欧州	北米	豪州
1年	10	0	3	0
2年	9	1	1	0
3年	4	7	3	2
計	23	8	7	2

※数字は、のべ人数 (令和4年4月1日現在)

### IV 帰国生向け年間行事

月	主な活動
4月	新入生体験入学会 第一回保護者会
5月	二者面談
6月	補充・発展学習開始 (以後12月まで)
7月	第二回保護者会 文化祭打ち合わせ会
10月	文化祭参加
3月	進路学習会 二者面談

### V 帰国生補充学習・発展学習

#### 1. 帰国生補充学習・発展学習の詳細

##### (1) 対象生徒

1～3年生の希望者

##### (2) 期間と時間

補充学習：6月～12月 年間18回

木曜日の放課後 1回あたり50分

発展学習：6月～11月 年間9回

月曜日の放課後 1回あたり50分

##### (3) 展開科目

補充学習：国語・社会・数学・理科

発展学習：英語

##### (4) 指導者

五教科の教諭およびスクールサポーター (以下、サポーター)

##### (5) 希望教科の決定方法 (補充学習のみ)

生徒・大学生ともに、第二希望までを取り調整

#### 2. 帰国生補充学習・発展学習の成果・課題

サポーターの協力を得て、全18回の補充学習を行うことができた。また、English Houseのスタッフの協力のもと、全9回の発展学習を行うことができた。

補充学習の成果として、今年度で3年連続、ほぼ定期的な学習会を行うことができた。以前の課題であった、補充学習における学習間隔の開きは完全に改善されたと言える。

また、発展学習においては、全9回、対面で充実した内容で実施できたことは感慨深い。担当者の尽力により、大幅に改善された。

課題として、補充学習に関してはサポーターの確保が困難であった点が挙げられる。一部、交代や補欠で別のスクールサポーターに臨時で依頼することで、人員不足を解消した。来年度はさらなる改善として、大学のインターンシップ実習を補充・発展学習に充てることを予定している。

#### <国語科>

##### (1) 実施状況

指導教諭 1人 大学生 2人

生徒 1年生 2人 2年生 1人

3年生 2人

##### (2) 学習場所 図書室

##### (3) 学習教材と内容 文章読解、国文法など

##### (4) 成果と課題

今年度も生徒2名につき、サポーター1名の形式で行った。3年生は文章読解の応用問題に、2年生と1年生は文

章読解の基本問題に取り組み、継続的な学習を行った。毎回の達成度は7、8割程度であった。ときどき苦戦する様子が見られたものの、自分のペースで丁寧にこなすことができていた。生徒同士で教え合ったり、予習内容や高校の入試問題にも興味を示したりといった、学年を横断しての学習ならではの交流が見られた。各自で答えの根拠となる部分に線を引くなどの工夫も見られた。

授業で課されたレポートなど優先すべき課題がある時には、それに専念することもあった。また定期テストの直前は漢字や文法など知識技能事項の確認を行い、テスト後は読み直しや解き直しを行った。1年生のうちの1名についてはソーシャルスキル・コミュニケーションに課題があったため、日本語学習のフリー教材を使用して語彙や表現力の向上を目標に設定した。いずれにせよ生徒とサポーターが積極的にコミュニケーションをとり、現状を把握した上で目標を設定し、学習を進める様子が見られた。

課題は昨年度も挙がっているように、生徒たちが「学習＝定期考査や受験に向けた活動」と捉えがちな点である。国語が苦手、という声もテストの点数に起因することがほとんどだ。しかし目先の数値目標からは少し離れて、外国語と日本語の性質の違いに着目したり、歴史的背景と関連させて学習させたりするなどして、生徒が純粋に語学を学ぶことの魅力に気がつけるような時間を設けることも必要だと考える。帰国生が国語を学ぶことの意義をあらためて考えるきっかけにもなるだろう。自在に言語を運用し、日常生活をより豊かにできるよう働きかけていきたい。



写真1 文法の学習をしている様子

## <社会科>

### (1) 実施状況

指導教諭 1人 大学生 2人  
生徒 2年生 2人 3年生 3人

### (2) 学習場所 社会科教室

### (3) 学習教材と内容

自作教材・独自プリント、教科書

歴史的分野

・近世の日本(2年) ・現代の日本(3年)

地理的分野

・日本の諸地域(2年)

公民的分野

・日本国憲法(3年) ・現代の民主政治(3年)

### (4) 成果と課題

補充学習の開始にあたり、生徒とサポーター、指導教諭で面談を行い、定期テストだけでなく、普段の授業の進度に合わせて学習を進めていくために、大まかな見通しはもちつつも、生徒のニーズに合わせて柔軟な対応をとる方針を確認した。

1人のサポーターに対して2年生2人、3年生3人の2グループに分かれて学習を行った。歴史の大まかな流れや都道府県や県庁所在地などの基礎的な内容や、社会科用語の読み方や意味などを復習する機会を多くとり、学力の向上に努めた。また、少人数で実施している利点を生かし、生徒の疑問や考えをサポーターが聞きとり、積極的にコミュニケーションを取りながら学習を進めることで、生徒の学習意欲や主体性を引き出し、意欲的に学習を進めることができた。公民的分野の学習と併せて、現代社会の課題やニュースなどの時事的な内容にも触れていくことで、社会的事象の背景やきっかけを作り、社会科の学習に対する興味・関心を高められるよう心掛けた。

課題としては、生徒個々の学習ニーズに応じた適切な学習難度の設定や、3年生には高校入試を見据えた学習の積み重ねが挙げられる。ICT機器を活用するなどして、生徒の多様な学習ニーズに応じた手立てを効果的に取り入れることができるよう、今後も試行錯誤を重ねていきたい。



写真2 生徒との学習の様子

## <数学科>

### (1) 実施状況

指導教諭 1人 大学生 3人  
生徒 1年生 3人 2年生 4人  
3年生 1人

### (2) 学習場所 数学科教室

### (3) 学習教材と内容

教科書・ワーク・自作教材(独自プリントや教具)

### (4) 成果と課題

今年度は、生徒3人に1人のサポーターが指導する形を基本とした。個別に面談をした上で、生徒の苦手な分野を中心に学習がすすめられるように、年間計画を立てることを心がけた。

実際の指導の場面では、授業の補習の形をとり、理解できていない課題や、定期テストの対策や振り返りなど、生徒が疑問に感じている所をサポーターが説明した。また、

生徒はワークで解いた問題を教科書で確認するなどして、理解を深めた。海外経験が長く、小学校で学ぶべき内容が定着していない生徒は、中学校に入学してからの不安を一つひとつ取り除けたことに補充学習の大きな意味合いを感じ取ることができていた。また、サポーターは生徒と話をし、必要に応じて他の問題集も活用することで、個に応じた指導ができた。特にこの点で、教員を目指しているサポーターにとって、よい経験となっている。

補充学習の運営面において、今年度は数学科の学生を3人とすることができ、前年度の課題であった数学のサポーターの確保については、解決することができた。来年度以降は新たなシステムを導入することになるため、教科の配分なども配慮したうえで、サポーターを配置してもらえることを期待したい。



写真3 問題の解説を受けている様子

### <理科>

#### (1) 実施状況

指導教諭 1人 大学生 3人  
生徒 1年生5人 3年生2人

#### (2) 学習場所 第1理科教室

#### (3) 学習教材と内容

実験練習、各学年のワーク、定期テスト直し  
・1年 (光の性質、音の性質、力のはたらき  
いろいろな物質、大地の変化)  
・3年 (運動とエネルギー、化学変化とイオン  
生命のつながり)

#### (4) 成果と課題

1人のサポーターに対し、1年生3人、1年生2人、3年生2人の3グループ体制で学習を行った。

事前に生徒と面談を行い、学習したい内容や苦手な分野等を確認した上で、年間計画を作成した。生徒からの要望にも応えながら、臨機応変に対応をした。

昨年同様、各学年のワークやテストの直し、既習事項の確認等を個別に行った。単位変換などの計算に対し苦手意識を持っている生徒が多いため、サポーターが身近な現象を用いて説明する等、指導の工夫をし、個別に対応することで、よりきめ細やかな指導を行うことができた。また、実際に実験や観察を行い、授業で行った実験内容などの目的や概念をゆっくり確かめさせた。学習の本質につい

て時間をかけ、個別に行ったため生徒の理解を深めることができた。さらに、授業中では気づくことのできなかつた細かな事象にも疑問をもち、考察する姿も見られた。

課題としては、実験器具の準備や安全性の確保を十分なものとすることがあげられる。丁寧な実験指導を行うために、サポーターと担当教諭との連携が今後さらに必要と考えている。



写真4 実験をしながら学習している様子

### <英語科>

#### (1) 実施状況

指導教諭 1人

生徒 [前期] 1年生10人 2年生6人 3年生 4人  
[後期] 1年生9人 2年生6人

(英検準2級以上かそれに準ずる英語力の希望者)

#### (2) 学習場所 English House (千葉大学内)

#### (3) 学習教材と内容 (方法)

[前期] 留学生とのインタビューを通じた交流

[後期] プレゼンテーション (日本の祝日や世界のお祭りについて)

#### (4) 成果と課題

帰国生英語発展学習の目的は、海外滞時に習得した英語力の保持・活用である。その目的達成のために、English House の職員数名、千葉大学の留学生の協力のもと、英語によるコミュニケーション活動を行っている。

新型コロナウイルスの感染拡大により過去2年間は年間を通じた活動ができなかったが、今年度は前期(4回)と後期(5回)に分けてまとまった内容で活動を行うことができた。前期は、千葉大学への留学生との交流が中心で、生徒は2~3人のグループに分かれ、1人の留学生について、出身国の情報や相手の関心のあるスポーツや音楽、食べ物などについてインタビューを行った。その後 Canva (無料のオンライン・グラフィックデザインツール) を用いて、まとめのスライドを作り、最終回でプレゼンテーションを行った。後期は、プレゼンテーションとQ&Aのやりとりが活動の中心で、生徒はハロウィーンや日本の祝日や興味のある世界のお祭りについて、各々学んだことをGoogle スライドにまとめ、発表をした。前後期ともに、English House のスタッフや留学生、また生徒同士でも、

英語で豊富にコミュニケーションをとることができた。

昨年度の課題だった実施回数については、計画的な実施により十分に確保することができた。ただ、生徒の家庭での学習や発表準備に頼る部分が多いため、学校でも、昼休みや放課後を活用して、生徒の課題への取り組みをフォローする体制を整えることが新たな課題だと言える。



写真5 プレゼンテーションをしている様子

## VI 文化祭での帰国生発表

### 1. 目的

帰国生は、入学時に一般学級への受け入れを実施しているため、学校生活では日常的に帰国生全員で活動する機会をほとんどもたない。そのため文化祭では、帰国生という一つの団体として協力し合って活動し、互いの交流を深めている。級友、先生、保護者、参観される外部の方々へ滞在国内の特徴や文化を発信して、帰国生への理解を深めてもらうことを目的としている。また、帰国生が自らの経験や個性を見つめ振り返りながら、それらを披露したり、発揮したりすることもねらいとしている。

### 2. 文化祭での「帰国生発表」の詳細について

#### (1) 実施状況

指導教諭 6人

生徒 帰国生 34人全員

#### (2) 発表場所 英語科教室

#### (3) 発表タイトル 「World Happy Paradise」

#### (4) 発表内容

ここ数年は、文化祭での帰国生発表に「ディスプレイ部門」と「パフォーマンス部門」を設けて実施している。今年度も、「ディスプレイ部門」にて、帰国生全員が滞在国内に関するミニポスターを展示し、自らの海外生活を紹介した。また「パフォーマンス部門」では、帰国生有志がクイズ、演示などに取り組んだ。

#### 【ディスプレイ部門】

コロナウイルス感染拡大防止や生徒の負担軽減のため、できるだけ労力をかけずに帰国生として伝えたいことを発信することができるよう工夫して取り組んだ。

滞在国内のミニポスター展示については、昨年度までのミニポスターに新1年生分の12枚を加えたことで、50枚以上の色とりどりのミニポスターがそろい、会場を賑わわせ

ることができた。

文化祭当日は、海外生活の様子についてミニポスターを通して紹介すると共に、滞在国内の遊具、民族衣装、装飾品、絵本などの実物をそれぞれの大陸の地図の前に置いた。これにより、異国での実生活を感じさせるような工夫をすることができた。そのため、ディスプレイ部門に対して、参観された方々の興味をより引きつけることができた。

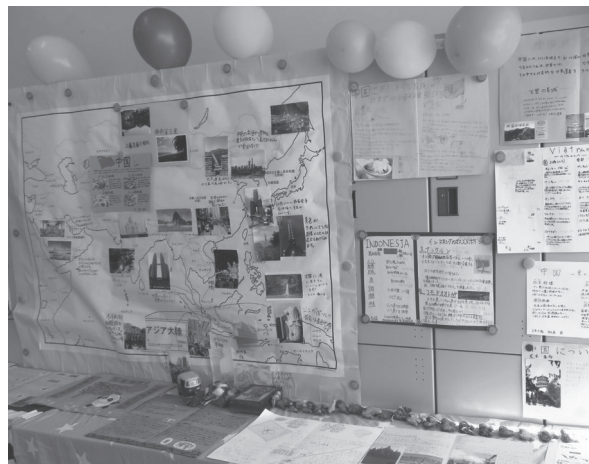


写真6 大型掲示物

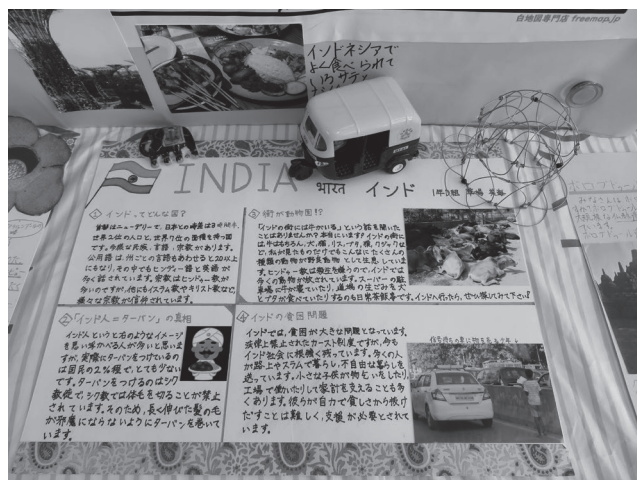


写真7 ミニポスター

#### 【パフォーマンス部門】

滞在国内の文化や特性を伝えるためにクイズや演示などの発表形態をとった。直接参観者とのやり取りをし、発表や答えを書いてもらうような参加型のものが多かった。

#### 発表その1 (カフトクイズ)

東南アジアの国々についてのクイズを行った。

#### 発表その2 (カフトクイズ)

東南アジア以外の国々についてのクイズを行った。

#### 発表その3 (目指せアジアマスター)

カフトを用いてアジアの国のクイズを行った。

#### 発表その4 (World Happy Paradise 3年女子)

滞在国内の意外な事実について紹介した。

#### 発表その5 (World Happy Paradise 3年男子)

サマダンやコサックダンスの実演等を行った。



写真8 サマンドダンスを踊る様子

#### (5) 成果と課題

過去の実践や制作物を蓄積したうえで進化発展させ、追加していくことを実行することができた。また、生徒の充実感や達成感が高かったことは喜ばしい。特に3年生の発表では会場全体に一体感が生まれていたことがうかがえる。

一方、課題としては、準備日程の計画を細部まで立てておくことが挙げられる。学級や部活動の準備のことも考えて、かなり早い段階で進めておくことが望ましい。

### VII まとめ

本校の帰国生教育は、海外教育条件に伴う未学習内容の補充や日本語の知識・能力の不足を補うための「補充学習」、また海外滞時に習得した英語力の保持・活用のための「発展学習」に特徴がある。いずれも希望制ではあるが、帰国生一人ひとりが学習に対する不安を取り除けるよう、個に応じたきめ細やかな指導に取り組んでいる。学習指導だけではなく、年に2回の教育相談で帰国生から学校生活についての話を聞いたり、ランチミーティングや放課後の会合などで定期的に帰国生部会の先生と帰国生がコミュニケーションを取り合ったりすることで、悩みや心配事などを取り除くように努めている。

また、帰国生だけではなく保護者に対しても連絡や報告などの連携をしている。年に2回の帰国生保護者会では、日頃の帰国生教育の活動報告や連絡を行っている。その中でも2回目の保護者会では、卒業生の帰国生保護者による「進路説明会」を実施している。保護者の関心が高いため、卒業生の帰国生保護者から話を聞き、今後の進路の参考になるような情報交換をする場を設定している。帰国生が海外で身に付けた特性を伸長させながら、これからも充実した学校生活を送れるように、帰国生教育の改善と向上を図っていききたい。

#### 【帰国生の文化祭反省より（一部抜粋）】

・今回のサマンドダンスの実演をパフォーマンスとしてやったことで感じたことは、やることや伝えること自体に意義があるということです。当初は時間もないし、やらなかつもりでしたが、先生からやれることをやってみた

らと言われて、サマンドダンスを選びました。当日はみんな楽しく、サマンドダンスを踊ることができたので、100%の完成度でなくても、実施することで楽しめたり、新しい発見ができたりするのを知りました。今後も様々なことをやってみたいです。

・とても満足感や達成感がありました。保護者の方々や去年来ていない生徒もたくさん来ていて僕の住んでいた国のことをより多くの人に伝えられて良かったです。また、今の1、2年生に良い発表が残せてよかったです。

・今回が初めての文化祭ということで、準備や発表等不安な部分は多かった。しかし、先輩方が飾り付けの方法を教えてくれたり、カフトでクイズを作る中で問題に直面したときは先生に頼ったりして、文化祭にギリギリではあったが、成功させることができた。ただ、集客に対する意識の低さで自分のクラスの来場者が少なかったことや、準備段階での計画性のなさで期限ギリギリになってしまったことなど課題はまだあったため、その失敗経験をしっかり覚えておいて、来年はより良い文化祭にできるよう活かしたいと思う。

・今年は友達に誘われて民族衣装であるサリーを着ての発表をしました。実際に着て見せたほうが印象に残ると思うから、少し恥ずかしかったけど着てみて良かったです。クイズでは「実際に住んでいたからこそわかること」を伝えられるよう意識して、体験談を織り交ぜながら話すことができました。来年はもう卒業して発表はできないけど、もし見に来れるなら後輩たちの活躍を見たいと思います。

・私にとって3回目の文化祭が一番色々な人に海外のことについて伝えることができたと思いました。一般生に刺激を与えることができる場所が文化祭だとおもっていたのでクラスのみみんなを呼ぶことができたことが良かったです。

・僕の担当の時間はカフトを行っていて、主に2年生が中心に遊んでいました。その2年生は大変楽しんだ様子でした。カフトをやっているときにも、滞在国レポートを見に来ている親などもいて、いいと思いました。見に来ていた親の人たちも、「おー」などと出来映えにおどろいていました。あまり帰国生ブースは知られていなかったけど、来た人はとても楽しそうでいい雰囲気できていたと思います。

・今年の帰国生発表では、kahoot というサイトを使って、東南アジアに関するクイズを発表しました。想像以上の人数が入ってくれたので安心しました。来場者参加型だったので、それなりに盛り上がったと思います。時間の関係上一部のクイズを省いてしまったのは残念でしたが、みんな楽しそうに参加してくれたので嬉しかったです。クイズの内容も興味を引きそうな内容を選んで作ったので、盛り上がる要因になったと思います。